佳作賞受賞者

佳作賞
「ぬくい闇」
『黄色い潜水艦』54号

天野律子氏

天野律子（あまの・りつこ）
一九四一年、岡山市生まれ。現在、宝塚市に在住。
大阪文学学校で川崎彰彦氏と出合い、のちに島田勢津子さんに誘われ、「黄色い潜水艦」の同人となる。爾来、唯一の小説作品発表の場として、「黄色い潜水艦」に書き続けている。川崎彰彦氏の作家精神を思うことによって、自らを励ましてきた。また、小林武雄氏に出合い励まされ、「半どん」にエッセーを書かせていただいた。小説を書くと同時に、短歌なども併せて書き続けてきた。口語と文語、散文と韻文、非定型と定型。それぞれの可能性を求めて、思えば長い歳月を過ごして来た。

美しくて深い妄想に触れる

書きたいものを書きたいように書く。同人誌ならではのこのスタイルは、なんと有り難いものでしょうか。全ては私の中から立ち上がってくるものに依って、書きすすめ書き終わります。書き終わりますと、必ずといっていいほど、また書けなかった、やはりダメだったと落ち込みます。しかたがない、次作でまた頑張ってみよう、ここで投げ出すのもみっともない。そう思って、再び書き始めます。こうしたことの繰り返しで、今までやって来ました。これからも、たぶん、続けていくのだと思います。

「ぬくい闇」の主人公には、モデルが居りません。主人公だけではなく、ほかのどの登場人物にも、これといって特定のモデルがいるわけではありません。書いている私の経験をなぞったものでもありません。物語のなかに顕れ、動き回り、逡巡し、迷いながら立ちすくんでいる彼らを、ひたすら書きとめていったものなのです。

登場人物たちが顕れて来るそのきっかけは、さまざまです。この作品の場合は、〈牡丹の花〉でした。例えば、石段で干からびた蚯蚓であったり、街角ですれ違った酒臭い男のジャンパーであったり、あるいは、泣き喚いている赤ん坊であったりします。もちろん、それらはあくまできっかけであって、いわゆるテーマとして中心をなすものではありません。書き終わってみたら、跡かたもなく消えているときもありますが、この作品の〈牡丹〉は、消えることなく女たちに対峙しています。

牡丹は我家の狭庭にもあります。この作品の中のように七本ではなく、四本です。一本は老木で二本は幼木です。それぞれ花色が違い、咲く時期もずれています。その牡丹を眺めながら、この作品を書きました。ぼんやりと登場人物の姿が見えはじめた時点で、その人たちのプロフィールをメモしていきます。たとえば、性別、年齢、職業、家族関係などなどです。不思議なことに、それらの人々は私の知人の誰でもないのです。会ったことのない人たちなのです。どうしてなのかは、私にも分かりません。その不思議さが、私を書くという行為に向かわせるのかも知れません。

表題ともなった〈ぬくい闇〉というのは、主人公〈わたし〉の姑である〈多紀さん〉が、その存在に気付き心を寄せている〝妄想〟のたぐいのようです。美しくて深い妄想です。〈多紀さん〉は〈あれ〉と呼んで、いつくしんでいます。最初の頃は、それを〈多紀さん〉の老いの兆候のように思っていた〈わたし〉ですが、しだいに〈あれ〉、すなわち〈ぬくい闇〉に近付こうとしていきます。

主人公の〈わたし〉は、子育てを終わり、単身赴任の夫の留守宅で、姑と暮らしているごく平凡な主婦ですが、その一見、平凡であるのかのような日常が、〈わたし〉の居心地の悪さの澱となっているようにも見えます。子供を育てるのに夢中だった過去の時間を否定しようとするのも、情緒の尾を引かない男との交渉にむかったりするのも、曖昧な居心地の悪さのせいかも知れません。主人公の〈わたし〉はいずれ、〈多紀さん〉の背後に積もっている時間の重さや澱、過去という思い出の中の無念などに、手を差し入れ触ることができるのでしょうか。

主人公〈わたし〉も、やがて〈多紀さん〉のように、穏やかそうに見える老女となって、〈ぬくい闇〉につつまれるのでしょうか。老いというものが、過去という時間の残骸を背後に積もらせているのならば、それはなんと残酷で豊かな財なのでしょう。そのあたりを、これからの課題として、書いていくことになるのでしょうか。

既刊著書
『水の上の鎖』一九九九年、洛西書院　詞歌集
『空庭』一九九九年、雁書館　歌集
『青漠』二〇〇七年、短歌研究社　歌集
『空中の鳥かご』二〇一二年、砂子屋書房　歌集
『広場の見える窓』二〇一二年、編集工房ノア　小説集